



# 桐蔭学園報



## 責任の自覚

理事長・校長 榊原 滋

バンクーバー五輪のスノーボードに出場した一選手の服装が大きな論議を呼びました。シャツのすそをズボンの外に出し、そのズボンを腰骨のあたりにまで下げる、いわゆる“腰パン”。そうした若者の“ファッション”をめぐるのは是非の論です。この腰パンの由来は囚人服にあり、自殺や事故の防止のためにベルトを抜いたのが始まりとかで、当の本家のアメリカでも論争の的になっており、一部の州や都市では、禁止令が出されたり、違反した場合は罰金や禁固刑に処せられたりする場合もあるようです。

「自分流が何故いけない」「腰パンも個性」との若者の声もあります。しかし、この場合は国を代表して参加する世界の大会であり、その資格での服装は公式のユニフォーム、すなわち制服なのです。日ごろ、生徒諸君が着ている制服も含め、制服の着用には、特定のグループに所属しているという「公」の資格が保証されています。一方、同時に、着用している以上は、グループの一員としての「責任」が求められます。今回の問題は、本人に、日本を代表しているという公における責任の自覚の欠如から起きたものだと、私は思います。

余談ですが、この件に関して、巷(ちまた)では、ものわりのよさを気取るかのような発言も出るなか、本校11期生で、当時、紫紺の詰め襟を制服として着用していた“やくみつる(ペンネーム)君”は、テレビや新聞で、その選手の、公衆の面前での言動の不見識を批判しており、さすが本校卒業生と感じ入りました。

桐蔭学園の建学の精神の第一番は、「社会連帯を基調とした、義務を実行する自由人たれ」です。現在の日本は、戦後のわがままな個人主義や高度経済成長期以降の物質至上主義により、自由をはき違えて、個人の恣意(しい)を野放しにする風潮が蔓延(まんえん)しています。桐蔭の建学の精神は、個人の自由を第一等の価値として尊重し、その実現のため、社会的連帯を基調とした「責任の自覚」を求めているのです。

以前、日本のトップ校と称する某女子校の生徒手帳を見たことがあります。そこに記載された服装・髪形の規定は「清楚(せいそ)で自然な形」の一言のみでした。正に、強いることなく、無言で、責任の自覚を促しているのです。反対に、生活指導に手を焼いている学校ほど、細部にわたる規定がこと細かに書かれているものです。

桐蔭の生徒諸君も、自らの「責任の自覚」を覚悟の第一と位置づけ、その上で、自由あふれる学校生活を送ってもらいたいと思います。

### 目次：

巻頭言	1
《特集》学年末考査に向けて ～1年間の各種試験を振り返り、次年度への飛躍を～	2
スクールニュース ◆ドイツ桐蔭ウインターキャンプ ◆「数理の翼」冬期セミナーに参加して ◆小学部ロボットクラブ 世界大会出場権獲得 ◆中学女子部講演会「高校時代の過ごし方」 ◆小学部 京谷和幸氏講演会	3
クラブ情報 春に向かって、錬磨を重ねよう！	7
桐蔭アゴラ ◆小学部 送別音楽会 ◆中学・中等教育学校吹奏楽部 定期演奏会 ◆3月の学校行事	8